

若年性認知症者も対象に 不明者対応指針 鳥取県が見直し

鳥取県は、認知症高齢者を念頭に置いた行方不明者の対応ガイドラインを見直し、65歳未満の若年性認知症者も対象として明記した。改訂は10月31日付。背景には、認知症を患う米子市の59歳女性が8月8日に行方不明となり、今に至ることにある。

この人を探しています



名前 荒川 泰子
年齢 59
身長 155cm

当時はボーダーの服を着用
認知症で自分の名前が言えません

8月8日の朝、米子市の自宅から行方不明。

これまでの目撃情報
・8月8日 米子から安来の9号線沿いを歩いていた
・8月11日 松江警察近く(9号線)の車道を歩いていた
目撃情報は米子警察署 0859-33-0110
情報提供をお願いします。

荒川泰子さんの情報提供を求めるチラシ = 荒川勉さん提供

この女性は、米子市祇園町2丁目の荒川泰子さん。自宅近くの県境を越えて鳥根県安来市の国道9号沿いを歩く姿が目撃されたことから、夫の勉さん(64)は、本人の特徴を記すチラシを鳥根県内で配布。松江方面で防犯カメラを設置する家庭や事業所、ドライブレコーダー搭載車両を中心に、情報提供を求めている。

鳥取県はガイドラインの見直しで「隣接県の福祉部門へ捜索のための情報提供の協力を依頼すること」も盛り込み、県境を越えた連携の強化を打ち出した。

鳥取県警によると、昨年の県内行方不明者は306人で、このうち、認知症の人は60人を数える。



浦上 克哉さん(67)

鳥取大医学部教授

プロフィール

1956年、岡山県生まれ。鳥取大医学部卒、鳥取大大学院博士課程修了。鳥取大の脳神経内科に勤務し、保健学教授に就任。2011年に日本認知症予防学会を設立。



疫学研究で大発見

子どもの頃、体が弱くて病院通いが欠かされた。当時の小児科は怖い医師ばかり。風邪をひいたと説明すると「誰か風邪と決めたんだ」と怒ったり注射されて泣く子どもの親に「なぜ泣かすんだ」と叱ったり。その中で、私は優しい医師に出会うことができた。本当にいい医師に出会ったことが、若くして亡くなった。「森先生」と呼んだ覚えがある。森先生みたいないい医師を志し、鳥取大医学部(鳥取県米子市)に進んだが、果たして私を選んで医局は小児科ではなく脳神経内科だった。

鳥取大医学部は脳の研究の先進地で、講義を受けながら「これからは必ず脳の時代が来る」と思った。私たちが、病気を治す研究を担わなければならない。脳神経内科医師の高橋和郎教授による講義に使命感を感じたものの、臨床医を目指す私としてはやりがいを見いだせずにいた。研究テーマの認知症は当時、画像診断が未発達のため、亡くなった後に解剖して初めて診断できる状況だったからだ。ところが、疫学研究を通じて大きな発見があった。高齢者を訪問すると、歓迎してお茶とまんじゅうを出してくれる。ある日、カビが生えたまんじゅうを出された。冷蔵庫を見てもう一つ、賞味期限切れの食品がいっぱい。臭くないですかと聞くと、「そうですか?」と返ってきた。つまり、この高齢者は嗅覚機能が異常だったのだ。そこに着目すると、物忘れの前に嗅覚機能の異常が起る時間的関係性が分かってきた。さらに、経過を見ながら、物忘れがだんだんひどくなっていくことも分かった。それならば、予防できるのではないか。そう気付いた。

「聖地」は琴浦町

11年に日本認知症予防学会は誕生したが、実は、その聖地は鳥取県琴浦町だ。

この夏、鳥取県内の書店で芥川賞の『ハンチバック』(市川沙央著)と肩を並べるように売れた本がある。『もしかして認知症? 軽度認知障害ならまだ引き返せる』だ。著者は鳥取大医学部教授の浦上克哉さん(67)。2011年に日本認知症予防学会を立ち上げた認知症予防の先駆者である。その横顔に矜持を見た。

(聞き手は論説委員長・深田巧)

鳥取大医学部は脳の研究の先進地で、講義を受けながら「これからは必ず脳の時代が来る」と思った。私たちが、病気を治す研究を担わなければならない。脳神経内科医師の高橋和郎教授による講義に使命感を感じたものの、臨床医を目指す私としてはやりがいを見いだせずにいた。研究テーマの認知症は当時、画像診断が未発達のため、亡くなった後に解剖して初めて診断できる状況だったからだ。ところが、疫学研究を通じて大きな発見があった。高齢者を訪問すると、歓迎してお茶とまんじゅうを出してくれる。ある日、カビが生えたまんじゅうを出された。冷蔵庫を見てもう一つ、賞味期限切れの食品がいっぱい。臭くないですかと聞くと、「そうですか?」と返ってきた。つまり、この高齢者は嗅覚機能が異常だったのだ。そこに着目すると、物忘れの前に嗅覚機能の異常が起る時間的関係性が分かってきた。さらに、経過を見ながら、物忘れがだんだんひどくなっていくことも分かった。それならば、予防できるのではないか。そう気付いた。

認知症は予防できる 『まだ引き返せる』ベストセラーに

団塊世代が全て75歳以上になる25年に高齢者の5人に1人、約700万人が認知症になると見込まれている。まさに身近に迫った病気であり、緊急性の高い課題だ。6月に成立した認知症基本法は「共生する社会」をタイトル

「琴浦町も、2004年に認知症予防の取り組みを始めたときは、認知症予防の『に』の字もないような状況でした。それが今では、1次予防(発症予防)、2次予防(早期発見・早期治療)、3次予防(病気の進行防止、すべての予防が充実している地域になっています。私としては、琴浦町の取り組みが多くの市町村に広がっていくことを願っています」と。

03年、琴浦町役場(当時は東伯町役場)の保健師から相談があった。「認知症の相談がひっきりなし。暴力、徘徊に家族が困っている。認知症になって3年も、5年もたつたら相談に来る。もっと早期に相談に来てもらえそうな仕組みがないか」とのことだった。私は、認知機能を判定するタッチパネル式のツールを用いた認知症予防教室を04年に琴浦町内で始めた。軽度認知障害(MCI)から認知機能が回復していく様子を目の当たりにし、効果があると確信した。



鳥取のベストセラーを伝える7月30日の日本海新聞紙面。写真上段は琴浦町で講演する浦上克哉さん(ラッシュ)

に掲げた。確かに、認知症になった人たちが安心して暮らせるようになることは重要なが、共生社会を実現するためには、予防が欠かせない。法律の要綱にも明記された「予防の推進」を、行政機関は実行してもらいたい。

記念日に願う

6月14日を認知症予防の日として、日本認知症予防学会は日本記念日協会に申請し、制定に至った。この日は、アルツハイマー型認知症を初めて症例報告したアルツハイマー博士の誕生日だ。博士の気持ちを考えると、認知症を予防する時代が来ればよいと願っていたのではないかと、そういう意味を込め、啓発活動を行っている。

編集後記

認知症介護に直面した家族のドキュメンタリー映画『ぼけますから、よろしくお祈りします』(信友直子監督を観賞した。「あんたらに迷惑をかけるけん、死ぬ」と泣きわめく87歳の妻。布巾から伸ばしたその手を95歳の夫が握るシーンは印象的だった。要は、安心してもらうことが大切なのかもしれない。「記憶のつそ」になってくさい、と浦上克哉さんは認知症家族にアドバイスしている。

HALMEK 12月号 賢く楽しく! お金の新常識 月5万円でも暮らさない 不安のない プログラ紫苑さんの知恵と工夫 電気代・ガス代 節約のつもりが実は損してる? 本当に得する節約アイデア24 ネットが苦手でも大丈夫! スマホ料金を安くする方法 銀行預金の目減りを防ぐ お安く賢く栄養満点を叶える! たんぱく質食材 保存術 & 手間なし健康料理 お得に楽しむ メリハリ 旅行術 航空チケットが安くなるコツ 入院介護費は実はこれだけ 過剰な備えの見直し/今すぐできる医療費が減る小ワザも 認知症の 専門医が考案 もの忘れ・認知症予防に効く最新脳トレ スマホで通話しながら数字を打つ方法 きくち体操 座ってお尻を上げる動きで尿トラブルを解消! 菊池和子さん [89歳] 簡単に作れて 使い勝手抜群! 糸で作るエプロンスカートのクリスマス飾り 11月号も 総発売中! 11月22日19時まで 12月号も 12月22日19時まで